

俳句と川柳 ～その重なりあうところ～ ②

金澤 健

おかしみ

ここでは、川柳の最大の売り物であるおかしみについて考え、それに俳句、なかんずく滑稽俳句がどのように対応していくかを、少し考えてみたいと思います。やり方としては、川柳の名句を挙げ、それに私の自作句を句合の形で付けて行きたいと思います。

1. 「穿ち」のおかしみ

なんといっても、川柳のおかしみの主流中の主流は、穿ちによるおかしみでしょう。例えば、

泣く泣くもいい方を取る形見分け (古川柳)

などは、人間のどうしようもない、しかし傍から見るとおかしくてしょうがない「業」を描いた絶品でしょう。

けれど、穿ちは川柳の独占物ではなく、滑稽俳句でも詠めるのです。

涼しさを説く高僧の玉の汗

えらいお坊さんだって、「暑い時は暑い」のです。だって、人間なのですから。

2. 「裏切り」のおかしみ

言葉、なかでも季語を用いる時はその季語の意味するところ（本意と言われます）を裏切って、おかしみを醸し出すことが行われます。

土下座して敵のアキレス腱さがす （沢田清敏）

土下座して謝るのでなく、相手の弱点を探し、すきあらばやっつけようとしているのです。

惜しまれず難儀な年の逝きにけり

ゆく年は惜しむものと皆さん思っておられますが、難儀な年で「やっど行ってくれて、やれやれ」という年も、きっと皆さんある筈です。そこを、すかさず詠みました。

3. 「茶化し」のおかしみ

川柳の方は、有名な俳句や短歌に茶々を入れるのがお好きなようです。

釣瓶取る朝顔も又子に取られ （繰政）

反対に、俳句の方から川柳を茶化してもいいのですが、私は、ある情景に茶々を入れてみました。

糸付けて凧に天まで上がれとや

自分で上がらないようにしておいて（糸付けて）、尻に天まで上がれとは。「それはないでしょう」と尻ならずとも、言いたいところです。

4. 「擬人化」のおかしみ

よく、川柳は人事を詠むものと言われますが、自然を詠んだ川柳の中にも名句はあります。その際、おかしみを醸し出すのは「擬人化」の手法であり、これは滑稽俳句（いや、花鳥諷詠の伝統俳句でも）で大いに参考にすべき点です。

海岸の松は逃げ出す姿なり （しげる）

擬人化の手法を頂きまして

引き返すわけにもゆかず滝となる

どの滝もみな「カッコ良く滝になろう」と思っていた訳ではなく、成り行き上、仕方なくなったという滝も、きっとある筈です。

5. 情景自体のおかしみ

日常生活に於いて、我々の身の回りには、思わず嘔き出したり、笑みがこぼれるような情景がごろごろしています。

本降りになりて出て行く雨やどり （古川柳）

これに、インスピレーションを得まして、

長夕立喧嘩はじまる雨やどり

これは、実際に私が目にした実体験を詠んだものです。
(次号につづく)